

交流

〈大会発表要旨〉

◆伊藤さとみ 談話機能から見る中国語における文末助詞「嗎」と「呢」の比較 「嗎」と「呢」は、文法研究の初期から、ともに疑問の意味を表すとみなされ、前者は真偽疑問文（＝「嗎」疑問文）を作り、後者は「嗎」疑問文以外の疑問文（疑問詞疑問文、正反疑問文、選択疑問文）に現れると記述されてきた。だが、この記述にはいくつかの問題がある。まず、「嗎」と「呢」が相補分布をなすことは、中国語学の中では、当たり前のよう

に考えられているが、通言語的に見ると、真偽疑問文のみ使われる疑問標識は一般的ではない。次に、「呢」は疑問文に現れるだけでなく、名詞句の後や平叙文の文末に現れ、話題をマークする、確認や持続のアスペクトを表すなど、疑問とは関係のない働きをする。そのため、複数の「呢」を仮定しなければいけなくなる。本稿では、「嗎」と「呢」は、

純粋な疑問標識ではなく、会話の共通基盤に対する働きかけを表すと考える。具体的には「嗎」疑問文は、当該命題を会話の共通基盤に追加してよいかを問う働きをし、「呢」は当該命題と対比される命題が会話の共通基盤にあることを示す働きをする」と論じる。

◆宮尾正樹 現代文学におけるタク

シー運転手の表象について 中国のタクシー運転手が民国時期の人力車夫の後継者として、本人たちからも、そして文化的にも意識されていることは、タクシーが客を乗せることを「拉（人）」などと言うことから容易に推測できる。人力車夫は弱者の象徴のように文学素材として用いられたが、現代の文学作品におけるタクシー運転手はどのような変奏を見せるのだろうか。同時に、現代の作品にはロバート・デ・ニーロが演じた『タクシードライブ』（1976）の影も見られるように感じる。タクシー運転手という職業設定が持つ特色に留意しながら、現代の「祥子」たちについて考えてみた。

〈例会発表要旨〉

◆董子華 六朝文学における「山」――

遊仙詩をめぐって―― 六朝期には、多くの遊仙詩が創作された。そして、山は仙界の所在として、また遊仙活動の場所として、詩の中にしばしば描かれている。後の山水詩が実際の山を描くのと比べてみると、遊仙詩における山は実在の山というよりは、むしろ幻想的な存在であると言える。また、六朝期においては、道教が盛んになり、道教思想の影響を受けた文人も少なくなかった。古来の神仙思想を吸収し、さらにそれを系統立てた道教では、山は自らの宗教に繋がる、特定の意味を持つ場所と見なされる。そして、道教における山のイメージは遊仙詩に描かれた山のイメージと似てはいるが、各々独自性を持つていであろう。要するに、道教の山は宗教的な山であるが、遊仙詩に描かれる山には、文学的な特質が現れると考えられる。7月例会では、道教思想における「山」と比較しながら、六朝の各時代における遊仙詩に描かれた山のイメージについて考察を行った。

◆鄧翔心 「V」得「NP・VP」文における「得」の後ろの統語構造について 様態補語を含む文のうち、「V」得「NP・VP」という形となる文に関して、

先行研究では「得」の後ろの統語構造がよく問題とされ、(i) 補語がNP・VPである、(ii) 補語がNP・VPである場合と、NPが兼語で文全体が兼語文である場合との二つの場合がある、(iii) 補語がNP・VPである場合と、NPが目的語でVPが補語である場合との二つの場合がある、の三説が挙げられている。本発表では「V」得「NP・VP」文における「得」の後ろの統語構造について考察し、「V」得「NP・VP」文における「得」の後ろの統語構造について、二つの場合があることを明らかにした。一つは、NPとVPの統語構造関係が緊密で、切り離せない場合である。この場合、補語がNP・VPである。もう一つは、NPとVPの統語構造関係が緩く、切り離せる場合である。この場合、NPが目的語でVPが補語であり、「得」は目的語を動かす補語であり、「得」は目的語を動かす補語内部に持ち込む働きと、動作主性

質や当事者性質を持つ目的語が述語の後ろに現れる現象を合理化する働きがある。

◆黄唯 沈從文と「文学啓蒙」 本発表では1930年代後期において、中国共産党が主体で起こした「新啓蒙運動」を手掛かりに、五四運動以来中国における「啓蒙」の内容について考察を行った。「個人の解放」とは五四運動以来の啓蒙における大きなテーマの一つであり、後期に至って啓蒙の主体である知識人の間において分岐が現れたがその趣旨は一貫して変わらないと言える。沈從文は30年代において多作な作家の一人であり、彼も「人の解放」を重視しているが、その理念は五四の啓蒙による受け継ぎがありながらも沈從文自身による修正が行われた。本発表を以て沈從文の30年代の作品に基づき、彼の「都市」「農村」「湘西」の三つの世界観から見える独特の「啓蒙」を明らかにすることに一石を投じることができればと思う。

◆董航 顔茂猷著『迪吉録』に対する中江藤樹の「借用」について——説話同士の比較検討を中心に—— 中江藤樹(1608~1648)は36~37歳の時、中国明末の顔茂猷(1537~1637)著『迪吉録』を取り入れ女訓書『鑑草』を撰じた。『鑑草』に収録された61条の説話のうち48条は『迪吉録』から借用しており、『鑑草』は実質上の『迪吉録』の節録であると理解できる。『鑑草』は、大著と言われる名作を多数抱えている藤樹が生前、刊行を容認した唯一の著述であり、藤樹の最も自信のある作品であると指摘されている。一方、『迪吉録』は、茂猷の勸善思想及び彼の知識人としての立場を示した著書であり、官民間わず多くの人々に有益であると評価されている。本発表では、『迪吉録』に対する借用を中心に、最も異同が見られる説話同士から一例をとって比較検討を行い、藤樹の中国善書に対する取捨選択の判断基準、言わば彼の思想や考え方を明らかにすることを目的とする。

◆胡穎芝 漱石文学における「縹緲」——『虞美人草』の「縹緲のあなた」について—— 『縹緲』は、『虞美人草』だけではなく、夏目漱石のほかの小説や漢詩に

も見られるのである。本発表では、この「縹緲」という言葉に着眼し、中国文学における「縹緲」の使い方を検討することにより、漱石文学における「縹緲」はどう扱われるのか論じてみた。「縹緲」はもともと「高く遠くかすかであるさま」を意味するが、『文選』『海賦』から

れず、小説にも言葉として直接には出てこないのである。実際、この無意味な空想世界も、明治の知識人が近代化に進む現実世界への不満や不安に対する解決策を見出せない矛盾を象徴していると思われる。

◆田田博子 物語における語りの技法

「神仙説」に結びつけられ、唐代においてこれを意識して作品で使っている文人も少なくない。特に、白居易の「長恨歌」により、日本の知識人もこの使い方を意識したと考えられる。また、漱石の小説や漢詩にも、この「神仙説」に結びついた「縹緲」の使い方を見つけられるので、彼もそれを意識しながら作品に使っていると思われる。さらに、『虞美人草』の前に出版された『草枕』に描かれた仙境那古井を合わせて考えれば、『虞美人草』における甲野さんの憧れる世界は、明らかに東洋的な「縹緲」たる理想郷Ⅱ仙境であると考えられる。ところが、漱石の描いた仙境は、「実体がない」という特色が見られる。その仙境はただ仙境に類似する場所だとされ、仙人や仙女は描か

「文章を物語にしているものは何か」「ストーリーはいかに語られているか」。これらの問題意識はいわば本報告の出発点である。研究方法はおもにジェラルド・ジュネットの「物語論 (narratology)」を用いることとする。また、テクストは葉石濤の「等待」(1967年)及び蔣勳の「少年池上」(2013年)を取り上げ、両者の表現の形式や技法について検討した。具体的には、①「ストーリーとプロットのずれ」②「語り手の位相」③「時間標識」④「時間軸の転換」⑤「視点の移動(多元焦点化)」などについて明らかにすることができたのではないだろうか。管見の及ぶ限り、「少年池上」は先行研究がな

く、また、報告者の研究対象である葉石濤作品についても、従来内容面(「何を」語っているか)から解釈されることが多い。ゆえに葉石濤とナラトロジー、両者の出会いに更なる意味を持たせるためにも、引き続き「語りの特徴」について考察をしていきたい。

◆田禾 現代中国語における文中動詞の省略について

本稿ではまず「是」の省略条件について、「S+1NP」の構文で省略可能、「NP一个」の構文では「是」の使用は禁止、そして「是」がアクセントポイントであると省略不可との事実文から、付加意味を表す動詞であれば省略可とまとめた。更にデフォルト原則を運用しながら、「会」の後に使用できる動詞の省略について、もし名詞から最初に連想できる動詞がテクニクを表す動詞であれば省略可というルールをまとめた。その上、新型中国語受身文の「被」の後の動詞省略の原因も、VPで表す結果から連想できる「MAKE」類動詞であるからと考えた。中動文と結果補語文の動詞省略は、Sの状態のみ説明

する際に、それぞれ必要がない動作行為を表すVxと原因を表すVを省略可と分析できた。様々な角度から、動詞の省略は話者が主観的な意見或いは客観的な事実を語る目的により、最適な文型を選ぶ結果であることを指摘した。

◆安本真弓 可能表現のメカニズム
「能」と「会」を中心に「能」と「会」は、いずれも「できる」義を表し、また「到達度」や「一定のレベルに達する」義を表すのは「能」であると従来の研究では指摘されている。しかし、「她很能说话、一口气说了一个上午」、她会说话、说出来的话让人心服口服」の例では、どちらも「到達度」や「一定のレベルに達する」義を表すと見えるが、前例は「能」で後例は「会」と明確に使い分けている。さらに「今天能游泳」は言えるが、「今天会游泳」は非文になるのも「到達度」や「一定のレベルに達する」からでは到底解釈できないものである。そこで、本発表では言語事実の再考を踏まえた上、「能」は「状況判断可能」として捉え、「臨時性」・「動態性」の意味

特徴を持つ。一方、「会」は「状態推測可能」として捉え、「恒常性」・「静態性」の意味特徴を持つと考える。
(博士論文要旨)

◆譚昕 テキスト言語学の観点からみた中国語におけるテキストの結索性——二つの非明示的表現を中心に——
本論文は、現代中国語におけるテキストの結索性について、二つの非明示的表現である「ゼロ照応」と名詞性要素「X的〇」を中心に考察し研究を行ったものであり、3部7章から構成されている。第1部は研究の概観であり、第1章と第2章からなる。第2部本論は第3章、第4章、第5章及び第6章からなる。第3章では、ゼロ照応について考察した。結果、中国語では節頭主語に関して、ゼロ照応より三人称代名詞のほうが、テキストを構成する力はより強いと、先行研究と異なる結論に至った。第4章では、日中両言語における節頭主語のゼロ照応について考察した。結果、中国語における節頭主語のゼロ照応の使用は必ずしも日本語より少ないとは言えないと、先行研究と異なる

結論に至った。また、日本語に比べる
と、中国語の三人称代名詞はテキストを
結束する機能がより明らかであると考
えられた。第5章では、「X的〇」に対
する概観をした上、先行研究に見られた
問題を呈示した。第6章では、「X的〇」
の振る舞いについて考察を行った。結果、
「X的〇」要素は代用機能を有しており、
テキストの結索性をもたらす働きをも
つという結論に至った。また、Halliday &
Hasan (1976)が示した結索性の表し方
ではないが、「X的〇」が持つ例示的な働
きを「例示」機能と名付けて提案を行
った。第3部は本論文における研究の結
びをなす部分であり、第7章からなる。
(修士論文要旨)

◆渡辺紀奴代 日本語の受身表現「れ
る、られる」に対応する中国語訳の考
察
日本語の受身表現「れる、られる」に
対応する中国語は、「被」を用いて表す
受身文だけでなく、語彙的受身文、存
在文、意味受身文、自動詞文、他動詞
動文、無対応とさまざまな形態で対
応している。日本語の受身表現に対応する中国

語は、なぜこのように多様な構文を用いて表現することになるのだろうか。本研究はその原因究明を目的とする。考察方法は、又吉直樹の小説『火花』とその訳本(毛丹青訳)を用い、まず先行研究の統計結果と比較するため、日本語の受身表現「れる、られる」に対応する中国語訳を構文別に分け、それぞれの出来事がマイナス・プラス・中立的イメージのいずれなのかを判断した上で、構文別の分布統計をとった。次に研究者たちの見解を検証し、さらに日本語の同一表現に対応する異なる中国語構文を分析した。

◆蘇茗妍 介詞「对」の話題機能について 本論文は現代中国語における介詞「对」について考察を行った。介詞「对」の考察は様々な観点からのものがあるが、本論文は対比話題の「对」と項を導入する「对」に分けて分析したものである。先行研究では「对」についての分析を文レベルで行ったものが多いため、本論文では実際の会話の中で「对」を含む例文を詳しく説明した。具体的には、第一章で「对」についての先行研究について述

べた。先行研究では、文レベルでの分析が多く、連用修飾語である「对」は項を導入し、連体修飾語である「对」は多義性があるとよく指摘されている。第二章では、話題及び話題化についての定義を説明した。話題は既知のものを取り立てて文頭に置くものだが、話題化の「对」は話題の特性を備え、さらには二つの命題が違う時のみ、対比性を持ち、対比話題を表す。一方、項を導入する「对」は必ず既知情報ではない、新しい情報を導入する傾向もあると述べた。第三章で取り上げる会話は実際のトーク番組から「对」を含む例文及びその前後の文脈を抜き出し、対比話題の「对」と項を導入する「对」について詳しく分析を行った。このように、語用論の観点で「話題」の理論に基づき「对」を二に分け分析した。その結果、対比話題の「对」は必ず既知情報でなければならず、二つの命題が異なる時には、さらに対比性を持つことが分かった。一方、項を導入する「对」は既知情報のみでなく、新情報も導入し、この新情報は次の話題への展開に大きな

役割を果たしていることも分かった。

◆姚媛 白先勇の作品における「漂泊感」について 本論文は、台湾作家白先勇の作品における「漂泊感」について考察を行った。当代中国語作家の中で、白先勇は最も読まれている一人であるだろう。20世紀60年代より、白先勇作品に関する様々な研究があるが、本論文は、白先勇の作品における「漂泊感」を抉り出し、白先勇作品の独自性と中国文学への貢献を作品分析と他の作家と比較に基づいて、詳しく説明した。具体的には、第1章で白先勇作品についての先行研究を述べた。先行研究では、1974と20世紀80年代を境界線にして、白先勇作品についての先行研究を3時期に分けた。第2章では、白先勇作品における「漂泊感」を説明した。本稿は、「漂泊」及び白先勇作品における「漂泊感」の定義を説明した。続いて、本稿は、白先勇の作品において、現れた「漂泊感」の三つの側面を析出した。章末で、本稿は、「漂泊感」に対して、白先勇の芸術手法を説明した。第3章では、中国現代文学に既存した

「漂泊描写」を説明した。本稿は、20世紀、20年代の郁達夫と30年代の蕭紅を取り上げ、各年代の「漂泊描写」の独自性を説明した。この上で、郁達夫、蕭紅と白先勇三人の比較も行った。このように、白先勇の作品における「漂泊感」の独自性を分析した。この結果、白先勇は、インテリと農民の漂泊の状態を乗り越え、さらに幅広い社会階層の漂泊の状態を示した。手法的に、白先勇は中国伝統文学の技法を継承した上、西洋文学の手法を用いて、「漂泊」描写の芸術手法も革新した。これは、中国現代文学にとって、白先勇作品の貢献であると考えている。

◆姚星煜 李煜詞に見られる「愁」従来の説のほとんどは李煜詞を前期詞と後期詞に分けて、前期詞は「靡靡之音」に概括され、後期詞は「亡国之痛」が満ち溢れているものとする。筆者から見ると、

李煜の詞は前期・後期に関わらず、多かれ少なかれ全体的に「愁」が感じられる。本論文では亡国を境界線とし、李煜詞を前後期に分け、その上、前期詞に「生離」・「死別」などの転換点も加えて分析する。

前期詞の主人公は女性をメインとし、主に閨情の「愁」を詠っている。創作テクニクは精巧であるが、内容は「無病呻吟」に近いと考えられる。その頃の李煜は、国を治める手段はなく、軍事も外交も他国に抑えられていた。彼の前期詞はその環境で作られた、現実逃避の果実であらう。しかし、身内を失った後に、李煜が書いた詞における「愁」は徐々に深まって、愁いの上に哀しみも加えて、詞に現れる感情も実感がこもっている。後期詞の主人公は大体李煜自身の視点から詠出したものである。国が減じるからこそ、深刻な愁恨を得て、詞作に含まれている「愁」も大きく変化した。創作テクニクも前期より洗練されて、簡単な文字で底のない愁いと痛みを表現できている。

ため、大学宿舍ではなく、台北日本入学校近くの天母という地区にマンションを借りて住んでいます。実は13年前の2004年から2005年にかけて、台大の交換留学制度を利用して、台大に留学いたしました。その年はちょうど台湾文学研究所の創立年にあたり、活気あふれる中、自分の時間を24時間満喫しました。今回、再訪し、かつて一緒に授業を受けていた友人たちの授業にゲストスピーカーとして呼んでいただいたり遊びに連れて行ってもらったり旧交を満喫しております。ただ、小学校が3時半下课のため、お迎え付きの塾に行かせたり友達の家遊びに行かせてもらったり、研究時間捻出に努めてはありますが、台湾文学関係のイベントが夜や週末に多いため、現地にいるのに参加叶わず、13年前を懐かしく思い出しながら、今日も台北の夜が更けていきました。

〈近況報告〉

◆赤松美和子 子連れワンオペ国外研修 2017年4月から2018年3

月まで、勤務先の国外研修制度を利用して、台湾大学台湾文学研究所に滞在しています。小学校四年生の娘も連れてき